

▶▶▶加藤裕治

映像をどう扱うか

今年の9月1日は、関東大震災から100年の節目であった。メディアでもさまざまな特集が組まれていたが、興味深く視聴したのはNHKの「映像記録 関東大震災（帝都壊滅の三日間〜）」（前後編）だ。この番組は、当時の記録映像を、最新の技術でカラー化・精細化し、目に見えるかたちで、震災に迫ろうとする。

しかし、映像を見やすくすることは、探求の出発点にすぎない。というのも当時の映像は、いつ、どの場所で撮影されたのか曖昧なものが多いからだ。番組ではさまざまな資料や研究者の知見をもとに、ワンカットずつ場所と時間を特定していく。

さらに困難がある。映像を読み解くことが難しいのだ。例えば震災直後と特定できた映像に、笑みを浮かべている人が写っている。だが当然、その映像でわかるのは「笑っている」までなのである。

なぜ笑っているのか。番組では膨大な音声データから抽出した震災体験者の証言や、当時の火災状況の資料をもとに、その時点では、その後が続く大火がまだ知られていなかったからではないかと推察する（ちなみに関東大震災は、発生後から3日間火災が続き、人的被害の9割がその火災による）。つまり、揺れが収まった後の安堵の表情かもしれない。さまざまな探求にもかかわらず、わかることはこれが限界なのだ。

映像は言葉よりわかりやすいと私たちは感じる。しかし実は、映像は「わかったつもり」にはなるが、本当に読み解くためには、言葉を尽くした説明が必要である。

そういえば先日、自民党女性局のフランス研修で、観光写真のような映像が問題になった。世間の関心とは異なり、私はあのエッフェル塔前の写真1枚だけでは、研修のあり方を判断できないと思う。必要なのは研修の成果を言葉で伝えることだろう。ただし現時点で私が知る限り、自民党女性局HPの研修報告には、PC画面からの閲覧で10行の文章と、説明のない8枚の写真が掲載されているのみで、報告書のようなものは見当たらない。

（静岡文化芸術大教授）